

---

# 時代を築いた者

アザトク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時代を築いた者

### 【Nコード】

N7722P

### 【作者名】

アザトク

### 【あらすじ】

これは乱世の前、まだ孫堅や黄蓋が幼かった時からのお話

―時代を築き上げた者達の生き様を描いた、ドキュメンタリー？

―刀と華雄が各地を旅して回り、色々としていこうという感じのお話です・・・はい。

## 〜プロローグ〜（前書き）

年末なのに初投稿

まあまあ頑張りますので長い目で温かく見守ってください。

## くプロローグく

ある日、大陸に一筋の流星が流れた。

それと同じ時間にとある村で二つの新たな命が生まれた。

一人は銀の髪をした少女、華雄と名付けられた。

もう一人は黒い髪をした少年、刃と名付けられた。

後に、大陸の一時代築きあげる大物になるとはこの時、誰も知らなかった。

く刃sideく

俺が生まれて三年、そう三年も経った。

俺の母親は俺を産むと同時に死んでしまい、親父も去年二歳の俺を残して死んでしまった。

二歳にして天涯孤独の身、村の人たちに助けられながらも生きてきた。

「おゝい、刃く！」

「どうしたく？」

外から声を掛けてきたのは俺の相棒の華雄、俺と同じ日に生まれたらしくそのせいかいつもこいつとはつるんでいる。

親とも仲良しで度々、華雄の家で泊まらせてもらったりもしている。俺が家を出ると、華雄が薪を割るときに使う斧を持っていた。

「本当にどうした？」

「ふふふ、私はこれから武人になるんだ!!」

そういえば先日、この村に武芸者がやってきて賊を倒してくれたんだっけ。

恐らくそれに影響されてだろう。

「そっか、じゃあ俺も武術始めようかな？」

「おお！ そっこなくては！」

「じゃあ今日は武器を選ぶ？」

「うむ、そうしよう！」

それから二年がたったある日

手抜きじゃないよ？

ある日、村に軍隊がやってきた。

旗印は『孫』

最近だが力を伸ばしてきた勢力だ。

だが俺と華雄はそんなこと気にする訳でもなく俺の家の裏庭で稽古をしていた。

「はあああああ！」

「とりやあああ！」

華雄は格好良いから戦斧を俺は珍しいという理由で布を選んだ。

それが案外俺達に合っていたらしく中々の手応えを感じている。

「らあっ！」

「負けるか！」

振り下ろしてきたところをカウンターで一撃、今日は俺の勝ちみたいだ。

「これで三百一勝三百敗六百三十四分けだね」

「むうう、勝ち越されているなあ」

俺は尻餅をついている華雄に手を差し出しながら笑う。

そこで俺達は木の陰から見ている二人の少女を見つけた。

俺らと同じぐらいの年齢の桃色の髪と銀髪の髪の少女、二人とも肌が褐色だ。

俺と華雄は互いに顔を見合わせてもう一度少女たちに顔を向ける。

「おゝい、二人とも来いよ」

「（ビクッ！）」「」

急に声を掛けられてビククリする二人、いつまでもこちらに来る気配がないので俺と華雄は二人の下まで歩み寄り無理やり連れてくる。「お前ら、ここらへんじゃ見ない顔だけど誰だ？」

「わ、私は姓は孫、名は堅、字は文台」

「わ、わわわ、わしは姓は黄、名は蓋、字は公覆じゃ・・・」

聞くところによると最近ここらへんに引っ越してきたそうなの。

「そうか、そうか。なら今日からお前らは私達の仲間だ！」

「え？」

「ったく、まあ華雄が言うならば良いか。俺の名は刃だ、よろしく」

「私の名は華雄だ！」

訳が分からないのかオロオロしている二人

くくく、そうだよな。普通は困るよな。

「俺らはもう仲間で家族だ、遠慮はしなくていい、困った時は頼れ、俺らの絆は鋼鉄よりも固く、決して壊れない」

「一人一（家族）の敵は皆一（家族）の敵、もしもなにか近所の悪ガキになにかされたら私か刃に言え、そいつらをブツ飛ばしてやる！」

『だから、お前らは二人つきりじゃない。安心しろ』

なにか俺らの言葉が通じたのか二人はポカンとした後に俺らの手を握ってきた。

そんな俺らの新たな仲間が出来たちよっといつもと変わった一日、ただどこれが幕開けだった。

## 「プロローグ」(後書き)

駄文ですが頑張ります。

応援なんかしてくれたりすると凄く嬉しいです。

お願いします。

～まじり～キャミレ一気にはげても通じます～(前書)

同日投稿です

「もう、キャラ一気に出てき過ぎっす」

俺らに孫堅と黄蓋が仲間になって三日、俺らはまた新しい仲間を見つけた。

「みんな、聞いてくれ。拾ってきた」

否、正確には華雄に拾われてきた。

孫堅達と一緒に褐色の肌、メガネがチャームポイントの黒髪の少女だ。

「こいつ頭が良いんだ、是非に仲間にしよう」

「いやいやいや、もう少し考えて行動しよう?」

拉致ってきたんですか華雄さん? 駄目です犯罪ですよ?

「ああ、周尚じゃない!」

「ん? 孫堅達の知り合い?」

聞けば孫堅と黄蓋の幼馴染らしい

「じゃあ決定だね、今日から君も仲間だ」

「ふえええええ!」

どうしてだろうか、この三人は凄く気が弱い。

「ふふふ、刃! これで私たちは武官と軍師を手に入れたぞ!」

「華雄、ちょっと落ち着いて」

華雄の頭を撫でながら落ち着かせる俺、なんだか黄蓋が羨ましそうにこちらを見ているがどうしたんだろ？

「秘密基地作ろう！」

「だから華雄、ちゃんと話に脈絡持とう？」

これから華雄には武だけじゃなくて勉強もさせよう。そう心に決意を固める俺だった。

そんなこんなで俺と周尚で三人に勉強を教えたところある日のこと、この太守の下へ客人が来たらしい。

例の如く気にせず俺らは遊んでいると馬に怯えている少女を見つけた。

隠れん坊のために俺一人で居たために誰も仲間はいない、でも見過ごすなんて俺には出来ずに話しかけた。

「ねえ、どうしたの？」

「ふええええん！ 助けて怖いよ〜！」

鼻水と涙を垂らしながら俺の胸に飛び込んできた。

「びええええええええええええええええええええええん！」

泣き方が尋常じゃないので俺は頭を撫で背中を擦ってあやしてあげる。

昔、華雄のこともこうやって宥めてあげてたなあ。

宥めているとようやく落ち着いてきたのか目を真っ赤にしながらも俺の胸で涙声で話し始める女の子

ブロンド色の髪からは女の子らしい良い香りがしている。

「あのね、お母さんたちが難しいお話してるからここで待ってたらお馬さんが怖くてそれでそれでー」

俺はそこでもう一度抱きしめてあげる。

「そうか、大変だったな。よく頑張った」

「うん、ありがとう。私の名前は罵騰っていうのよろしくね」

「おう、俺の名は刃っていうんだよろしく〜」

そこまで言っただけ俺は気が付いた。

「刃の浮気者〜！」

遠くから走ってきた華雄と黄蓋に殴り飛ばされた。  
俺は何も悪くねえ！

「ってことがあったんだよ、酷いと思わないか二人とも！」

俺はみんなが昼食を食べに帰ってしまったのでいきつけの食事処にいた。

「それは刃がいけないと思うわ」

「うむ、黄忠の言う通りじゃ」

「敵顔までそんなこと言うなんて」

ここの食事所の娘と住み込みの人の娘の黄忠と敵顔は俺と華雄の幼馴染だ。

「刃は鈍感だからね」

「俺は鈍感じゃないぞ？」

「いいや、十分に鈍感じゃな」

少しショックを受ける俺、そんなつもりは全くないんだけどな。

「まあそんなところにワシらは惚れたんじゃないがな（ボソッ）」

「え？　なんか言った？」

「なにも言っておらん！／＼／」

まあ良いが、こうして今日も俺の一日が過ぎていく。

くもっ、キャラ一気に入出てき過ぎっす〜（後書き）

グダグダじゃねえか。

はいアザトクです！

うん、正直言って一日二つはキツかったんです。

文才が欲しい、夢も欲しい、妄想も浮かんでほしい。

てなわけで後書きもグダグダだけでもよろしくです。

～真名の試験～（前書き）

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願い致します。

く真名の試練く

「・・・・・・・・華雄」

「はい！」

「・・・・・・・・刃」

「・・・・・・・・はい」

月明かりが照らす暗い道場の中心で俺と華雄は孫堅の両親・・・・つまりはここの県令と向き合っていた。

県令だけではない、村の大人達がこの道場に集まって静かにこちらを見ている。

俺らの周りには蝋燭の炎が揺らめき時間が経つにつれ大人達の顔には真剣さが積もっていく。

もちろん俺らも真剣だ、これは儀式。

仲間内では俺と華雄が初めての体験だ。

「これより真名の儀式を始める」

そうこれは儀式、その者の真名を決めることになる恐らくは一世一代の儀式

誰もがこの儀式を通過し真名を授かることになる。

「これよりお前達にはこの道場の奥にある『静寂の間』で自分と向き合ってもらおう」

そう真名とは己の本来の姿、その者の本質、生き様を示した名故に真名の儀式とは己と向き合い己の中の存在を理解しなければならぬのだ。

「厳しい儀式になるやもしれんが自分らしくやってくれ」

『はい』

見届け人である孫堅の父ちゃんはずつと横に移動し俺らに道を開ける。

俺と華雄は歩き出す。

意外と長い廊下を進むと突き当りに二つの部屋があった。

「刃、ここで別れだな」

「ああ、真名授かったら一番に教えてやるよ」

「ならば私もだ」

コツンと拳を突き合わせて俺と華雄は『静寂の間』へと入って行った。

華雄 side

部屋に入るとそこは真つ暗で物音も一切しない、まさに【静寂】であつた。

不思議な雰囲気のあるこの空間の中心で私は仰向けに寝そべり目を閉じる。

これが私の・・・いや私と刃の落ち着く態勢だ。

私達がまだ二人だった頃はこうやって空を見上げながら一日を過ごしたな、思い返すとあの二人だけの時期が非常に懐かしく感じる。

三年、そうだ三年が経つた。

私と刃だけだったのが、孫堅と黄蓋を見つけ、周尚を拾って、黄忠と敵顔が仲間になり、馬騰が助けられた。

うん？ 考えてみれば刃の周りには女しか居ないぞ？

まあ、いいか。

そろそろ私の過去ではなく中に意識を傾けてみるとするか。

————ドクン————

心臓の鼓動が聴こえる。

だがそれも一瞬、目を開けた私の目の前には一本の道があつた。

「なんなんだこれは？」

道以外の景色は全て黒、立ち止まってもしょうがないので私は歩き出した。

刃 side

華雄と別れた後、俺は真つ暗で静かなこの部屋で仰向けになって寝そべった。

ゆっくりと目を瞑り意識を集中させる。

イメージだ、自分の生き方やなんやら難しいことではなく単純に何がしたいかをイメージする。

俺は昔からやりたいことは決まっている。

華雄、あいつを俺が守りたい。

それを実行する為に力を付けている。

俺と同じ日に生まれ、いままでずっと一緒に過ごしてきた子。

自分の半身と言っても過言ではないほどの付き合いだし・・・その、なんだ。

俺は華雄の事が好きだ、もちろん異性としてノノノ

だが華雄はこの気持ちに気づいてくれない、猪突猛進な素直な子で両親を幼くして失った俺を孤独から救ってくれた子でもある。

今度は俺が助けたい、一生とはいかなくても隣に立って歩みたい。

あの眩しい太陽に俺は憧れ、好いている。

だから俺は力をつけたい。

『グララララ、坊主が言うじゃねえか』

突然声がしたので目を開けると、目の前には身の丈3メートルはあろうかという立派な白い髭をした大男が同じく背の丈ほどもある偃月刀を手に座っていた。

ここは船の上？ いやなんで船の上なんだよ！？

「誰だおっさん？」

『俺か？ 俺はだな・・・いや、なんでもねえ』

「？」

意味がわからねえがこいつが俺に真名をくれるのか？

『残念ながら小僧に真名とやらをやるのは俺じゃねえ』

「じゃあ誰だよ？」

『グララ。とりあえずは、俺も無意味にここに呼ばれたわけじゃねえらしいんだ』

そう言っておっさんは偃月刀を持って立ち上がる。

『お前えさん、惚れた女あ守りたいんだろ？』

「ああ、そつだ」

『小僧のクセに良い目してやがる、いいだろう。俺がその力つけてやる』

華雄 side

一体いくら歩いただろうか？

進めど進めど道は続き、私は気が滅入ってきた。

するとようやく私は大きな門に辿り着いた。

大きな石造りの門、まるでなにかを祀っているかのような、威厳が溢れ、そして美しい門だ。

「ぬ、ぬう、開かない」

力不足なのかこの門を幾ら押そうとも開かない。

それでも華雄は押し続ける、諦めずに押し続けると

「おっ」

ゴゴゴと門が少し動き子供が一人通れるか通れないかぐらいの隙間が開いた。

「んしょ、んしょ」

頑張ってたなんとか通った先には玉座が一つあり、道の横には様々な武器があった。

ここは玉座の間で、私はあの玉座まで辿り着けばいい。そう悟った。玉座まで一直線、私は歩いていこうとしたが問題があった。

ガチャガチャガチャガチャ

鎧を着た、人間ではないなにかが進行方向に布陣する。

「そうかそうか、なるほどな」

なんでこうなったかは解らない、なにせ私はそういうことは刃に頼りつきりだからな。  
でもすべきことは分かる。

私は私らしくなんでこうなったかを考えるよりもすることがある。  
丁度横に刺さっていた両手剣を抜いて私は駆け出す。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ドゴン！ ガシャガシャガシャ・・・

一振りですべては斬り倒したが直ぐ様復活し、厄介なことに敵が更に増えた。

「面白い、やってやろうではないか」

私は私らしく暴れまわってやろう。

そのあとで刃がなんとかすればいい。

刃 side

「はあはあはあ」

『グララ、まだまだ弱いな小僧』

ちっ、化け物かよ。

どれほど戦っているかはわからないが全力で本気の攻撃を休みなく出しているはずなのに効いていないようだ。

「ふっ、しゃらあ！」

偃月刀を横に一閃してきたので勢いよく前に飛び込み、その勢いを利用して跳ねあがり大男の顔面に蹴りをお見舞いする、が。

『俺の顔に蹴り入れるたあ、グララ、まあ及第点をくれてやる』

足を掴まれてそのまま叩きつけられる。

くそつたれが、自分の船が壊れて・・・ない？ いや、この威力で壊れないってどんだけ。

生まれたての小鹿のように足を震わせながらもなんとか自力で立って大男を睨みつける。

『グラララララララ！ どうやら及第点どころか余裕で合格点じゃねえか！』

なにがおかしいのか嬉しそうに笑う大男



だった。

### 華雄 side

得物を振るい、殺し、得物が壊れ、私は吹き飛ばされ、ボロボロになりながらも進み、新たに武器を拾って戦う。

その繰り返しである。

「キリがない、だがしかし」

止まっではいけない、ある一線からは奴らも攻め込んでこずにいるが私は理解している。

もしも吹き飛ばされてすぐに起き上がらなかつたり、立ち止まったらその時はこいつらに殺される。

武器も壊れれば次の違う武器がすぐに現れる。

だがそんなことに意味はない、目指すは玉座。

必要なのはこの大軍を突き進める武器。

幾ら業物の武器が次々に現れようと私の為の武器ではない  
とここは抜けられない。

そう確信している。

「ぐはっ」

また吹き飛ばされる、意識も朦朧としてきた。

ユラリと前へ進む、止まらない、止まってはいけない。

そして私はあるうことか武器も持たずにユラユラと前へ進む。

ははは、とうとう自暴自棄か華雄よ？

我ながら情けなくは思うがそれもまた一興。

私は朦朧とする意識の中で一つの事だけを考えていた。

刃、私の幼馴染

姓と字を呼ばれるのを嫌っている不思議な奴。

私ですら姓と字を知らない、村の人間に聞いても黙っている。

私の相棒で私がやり過ぎたりすると止めてくれたり、私になにかしようにすると必ず文句を言いながらも付いて来てくれる。

真名の儀式

人によって内容が違うらしいけども刃はどんなことをやっているんだろう？

思ってみれば私、気が付くとあいつのことばかりを考えている。

恋・・・なのかな。初めてであるからわからないけどもあいつと一緒に居るだけで幸せな気分になれる。

刃とはいつとも一緒だった、今回の真名の儀式もそうだ。

敵が来る、なんか刃に比べたら遅いな。

攻撃をユラリと躲す華雄

そうだ、いつもそうだ。あいつは私にいつもくっ付いてきていつも隣で笑っている。

ユラユラと蝶のように斬撃の雨を躲し続ける。

私がいつか村に来た旅の武芸者に興味を持って武術をやる時も付き合ってやるって言うてくれて嬉しかった。

私が病気の時には村の手伝いをスツポカシテでも看病しにやってくるし、他の女の子とイチャつきながらもなんだかんだで私を気にしてくれてるし。

くくく、あいつは私に依存しているな。

「まあ、それは私もか」

そう、私はあいつに依存している。

私にとって一番大切な存在。私の力であいつを守りたい。

そのためには力が必要だ。

これでもかっていうぐらいの凄い力が。

いつか見た旅の武芸者のように華麗なる技は私には向いていない。

こう、そうだ。力強く、出鱈目のような力。

私は自然と歩み寄る。



く真名の試練く（後書き）

いかがでしょうか、色々とミスをしていたので今までのお話も訂正  
させてもらいました。

まあ、後書きと言っても今回は特に報告もないのでこれぐらいでノ  
シ

## 出立（前書き）

約一ヶ月ぶりぐらい？

みなさんお久しぶりです

## 出立

なにが起きたんだ？

俺は困惑していた。

目の前にいる白ヒゲと名乗る大男

その男がなにもない空間を叩いたと思っただら大気にヒビが入り地面を抉りながら俺に向かってきた。

当然直撃してしまった俺は吹き飛ばされてしまった。

「ガバツ・・・グウ・・・」

『グララ、どうだ小僧？』

どうもクソもねえ、ゴミみたいにただ這い蹲って呻くしかできねえよ。

俺は知った、世界一の攻撃を

俺は感じた、世界一の重みを

俺は味わった、世界一の強さを

『言葉も出ねえのか？』

「舐めんなクソジジイ！」

俺は決死の覚悟で立ち上がり吠える。

『グララ、それでいい』

ゆっくりと近づいてくる白ヒゲ、ちっ、立ったのは良いがそこまで  
が限界のようだ。

うんともすんとも体が動かないねえ、これはまずいねえ。

しかし襲われると感じたその不安は無駄に終わった。

『まあ、飲め小僧』

俺の目の前で座り、大樹のような広い杯とこれまた大樹のような徳  
利を置いて杯に酒を注いで俺に差し出してくる。

『グララ、まあ少し話でもしようや。時間はまだあるんだしよお』

俺は聞いた、世界一の全てを

玉座になんとか辿り着いた私はなんとなくだが玉座に座ってみた。

そして私は驚愕した。

眼前に広がるのは先程まで私が倒してきた傀儡どもの残骸。間違いのなく【戦】の跡

それもこれも全て私一人で成した所業

私は鳥肌が立った。

初めての戦で、初めての勝利で、初めての覚悟を決めた、この【戦】

待っていたのは高揚感や達成感ではなく居た堪れないほどの悲しみ

今、私は泣いているだ。

手には切ったはずのない、肉を切った感触

眼前には傀儡だと思って切っていたはずの真っ赤な死体。

重い、身体ではなく心が重い。

こういう時にいつも刃が私の支えになってくれていたのに今回はいない。

これは私だけで乗り切らなければいけない問題

全て私の手で解決しなければいけないのだ。

「はああ！」

だから戦斧を振るい続ける

手に力が入らなくとも振るう

これは孤独な闘い

負けられない

刃との約束を果たす為にも

全力を持って一薙ぎして敵を蹴散らす

野生になれ

気高く、荒々しく、醜くも生にしがみつけ

私は戦斧を振るい続けた

どれぐらい振るい続けたかも分からないほどになった頃

私の腕には一切の力が入らなかった

だが目の前には残骸の山

動く物などなにもない

私は玉座に腰を降ろす

なんとも寂しい光景だ。

これが王の見る景色か・・・

どうせ自分では王になれないんだ。

ならば支えることぐらいはしてやっても良いか。

『それがアンタの決意ね？』

突然声がした。

気が付くと玉座の間ではなくて真っ暗な空間に私と獣の耳を生やした女が立っていた。

『さっきのがアンタの決意？』

「そつだ、お前が誰だかは知らんがそれは本当のことだ」

例え誰であろうとこの心を偽るつもりはない！

『そ、なら良いわ。真名をあげるからとつと帰って。ここは私の世界よ』

真名？　なんか授けるの軽くないか？

『アンタの真名は嵐々(ランラン)、精々その名に恥じぬような生き様を世界に刻んできなさい』

パチンと指を鳴らす女、すると扉が現れて私は吸い込まれた。

『次に会うときはじっくりと話でもしましょうね』

私の意識は遠ざかっていったのだ。

side out

俺は部屋から出てくると同時に華雄も出てくる。

「……………よう」

「……………ああ」

二人とも本気で疲れた様子で部屋を出てお互いに無言で皆が待つはずの道場へと足を運ぶ。

時間にして約一時間ぐらいしか経っていなかったらしく俺らが部屋に入る前の状態で皆が待っていた。

「よくぞ戻ってきたな」

その顔は喜びや驚き、悲しみや様々な感情が読み取れる。

「まずはおめでとう、真名の試練を乗り越えたようだな」

「……………ああ」

「……ちゃんと二人とも授かってきたよ」

大変だったけどな。

「ではその武器は？」

「私は真名を授かった時に渡された」

「俺もだ」

目覚めたら俺の脇にあったのだ

「そうか、ならば真名は教えるな」

「な、なぜですか？」

「それは一族の掟だ、我らが真名を教えて良い時は二つ。一つは己が死期を悟ったとき」

「もう一つは？」

華雄が息を飲んで尋ねる

「己が生涯を通して一番信じる者だけだ」

そう言った長老の威圧は凄まじかった。

「同時にだ、真名を授かったならばその名に恥じぬ生き方を見つめるために旅に出る」

「「は？」」

突然のことで俺らは戸惑う

「まだ日は登っていない…日の出とともに二人とも村を出て行きな  
さい」

こうして俺らの物語は始まった。

出立（後書き）

がんばります

閑話 目指すもの(前書き)

今回は本編に一応関係します

## 閑話 目指すもの

俺らのはあの後、村の大人達に見送られ仲間にも別れを告げられずに旅に出た。

それから三日目の夜のことである。華雄と二人で焚火を囲みながら黙っている。

「「な、なあ」「」

ぬ？ ハモツてしまった。

「なんだ？」

「お前こそ、なんだよ？」

「…刃が先に言え」

「……………」

ぬぐぐ、ええい勇気を出すんだ俺！

「…真名をお前に預けようと思ってだな」

「そ、それはつまりあれかそのく／＼／」

ぬう！ 分かってるさ！

これって告白と同じだからね！ 真名預けるのは俺らの中じゃ死ぬ時以外は生涯通して一人しか言えないんだからね！

「い、いいのか私なんかで？」

「あ、ああ、当たり前だ、昔からお前と一緒にだしな／／」

「じじじ、実は、私もお前に真名を預けようとしてたんだ」

なんですと！？ まさか両想い？

え？ マジで？ いやいやいや、え？

「これから先、お前以上の男と出会えるとは思えんしな／／」

そつ顔を赤らめながら言う華雄

「…なら真名を言おう、俺の真名は一刀だ」

「私は嵐々だ、これからもよろしく頼む」

ガシツと握手をする。

その日、いつも通り夜空を見上げながら寝ようとしたがどうにも寝れなかった。

あれか？ 俺ってば華雄に告白して緊張とかしちゃってるわけ？

「なあ、刃」

そんなことを考えていると俺と同じなのか寝たと思っていた華雄から声を掛けられた。

「……そつち、行っていいか？」

「……おう」

モゾモゾと俺の横に寄り添ってくる華雄  
おおお！　なんだこのシユチュは！？

「お前は怖くないのか…？」

「怖いって何がさ？」

若干震えながら俺の服を握っている華雄

「これからの旅路でどんな危険が待ってるかも分かんないんだぞ？」

「なるほどな…華雄、俺にはな夢ってものがあるんだ」

「夢？」

「そうさ、目標であり、憧れであり、夢である」

「初耳だな、なんだそれは？」

「むふふ、それはな」

俺がずっと憧れ続けたもの、それは

「天下の大將軍、だよ」

「天下の…大將軍？」

「そうだ、“ただの”大將軍じゃなくて“天下の”大將軍だ」

「普通の大將軍じゃないのか？」

「全然違う、うまくは説明できないんだけども全然違うんだ」

俺は語りだす、その昔の話だ。

俺自身も見たわけではないからわからないがその昔、秦の国に王貴という將軍が居た。

その將軍は秦の怪鳥とも呼ばれ

「他にもそんな凄い奴らが沢山いるんだけど俺はそいつらみたいになりたい」

「ふふふ、ならば私も目指そう。どうせならば二人とも“天下の”大將軍にならなければな」

「よっしゃ！ 明日から頑張ろうぜ！！」

俺は将来、華雄と共に自分達の部隊を連れて戦う姿を想像しながら眠りに付いた。

やっつてやるぜ

閑話 目指すもの（後書き）

もっとみなさん、気軽に感想等をくださいませ

二人の夜（前書き）

五か月ぶりですかね？

他の作品にはすっかり浮気してて処女作の恋姫がおろそかになっていました。

すみません

では、本編にどうぞ！！

## 二人の夜

「嵐々々、そろそろ休まないか？」

「なにを言っておるのだ、さっさと進むぞ一刀」

俺達は今、大陸を旅している。

目指すは洛陽、官軍に仕官するつもりだ。

この国は五湖と呼ばれている勢力と戦っている。

今はそこまで激しくはないが、いずれ近い将来には大きな衝突が起きると俺は予想している。

「でもさ、もう二日も歩いてるんだぜ？」

「前の村で村長に聞いた話では徒歩だと三日かかると言われた。つまりこのまま頑張れば今日中に着くということだ」

おお、華雄さんや……いつの間にそんなことを聞いていたのだろうか。

流石は我らがリーダー

ちなみにだが俺と華雄、真名は二人きりの時にしか呼ばないようにしている

真名を教える時は死ぬ時か生涯を共にすると決めた者だけ。

つまり、俺達にとって他の人よりも真名は秘匿性が高く、重いものなのだ。

おいそれと知られたくない。

「しかし、今の帝様は戦争がお好きなようだな」

「そうだな、ここまで漢の領土を広げたのも帝様なのだしな」

だからこそ、俺達は仕官する理由がある。

戦争には人が必要、俺らのような幼くたって兵として雇ってくれるはずだ。

「お、見えてきたぞ」

嵐々の言葉を聴いて俺も向こう側を凝視する

すると、うつすらとだが確かに見えた。

「あと、半日ぐらい歩けば着くか」

「はあ、あと半日か」

まだまだ、先は長そうだぜ。

半日後、ようやく俺達は洛陽についた。

「おお、人で賑わってるな」

「まったくだ、当然ながら私達の村よりも活気に溢れている」

まあ、それはそうだろうな

「とにかく、泊まる場所を探さない？」

「それもそうだな」

仕官するにしてもいきなり将にはなれんだろうし、将でなければ城には住めないはず

それにこの世は女尊男卑が激しい

嵐々ならば直ぐに頭角を表せるかもしれんが俺は難しい

名家の出なんかではないし、歩兵から將軍にまでのしあがるだなんて、実例が居ないわけではないが少なすぎる

今の世にはそんな人は居ない

名將は居るが、全員が名家の出身

グララ、なんとも厳しい世の中だねえ

おっと、白ヒゲの影響かな？

この笑い方は嫌いじゃないけど

それになんかしっくり来る

「刃、ここでどうだ？」

そんなこと考えてる内にどうやら嵐々が宿を見つけたらしい

特に否定する要素もないので受付に向かう

「えっと、二室「一室、一番安い部屋で」……華雄」

「経費削減だ、ただでさえ私達は旅路で金欠なのだぞ？」

わかってるけどさ

どうせ一番安い部屋ってさ

「……寝台が一つなんですよね」

「別にいいじゃないか」

良くねえよ

こいつ、寝るときに抱き着く癖と横になって寝るときには全裸になるんだ

俺が床に寝ようとする怒るし

毎晩毎晩、色々大変な訳ですよ

絞りつくされちまうんだ。

人一倍、戦闘欲が強い嵐々はその欲を性欲に変えて俺にぶつけているらしい。

「さあ、寝ようか！」

「……………今晚もキツイ戦いになりそうだ」

俺ってば、仕官する前に死ぬんじゃないだろうか？

## 二人の夜（後書き）

サブタイが思いつかないなり

この作品のメインヒロインは華雄です

そして、原作が始まるまで十数年あります。

しばらくは原作キャラもほとんど出てきませんのでご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7722p/>

---

時代を築いた者

2011年8月2日23時15分発行